

人々の間に涙を数えている人がいるのだと、いつ知ったのだろうか。私としてはそんなことを思い出すのも面倒くさく感じていた頃も思い出す。きっと私のことを覚えている人なんていないだろうね問う感情と共に。

いつも笑ってくれている人のことを思い出すと、いつの間にか私の表情も笑っている。同じことだ。私は私であり、彼女は彼女である。それだけ当たり前なことなのだろう。ずっと思い出したい記憶は底にあり、どこにでもいるような人々を隠し切れない記憶を持つていることにも疲れを覚え始めたのはいつの頃だろう。わからないけれど、きつと。

どこにでも笑っているのはあなただけよ。

どこともなく、聞こえた声に、ハツと意識を思い出す。そして、私は笑ってみる。そうしたら笑っているのが嬉しくて、こんなにも幸せな気分になるんだなって思った。私という存在に意味を見出したのだから。強く存在を願い、また、笑っていく人生というものが時々良いものかもしれないと、思ってしまった。過去にさよならを、未来にありがとうを。それが私の道。辿ることが誰にでもできない、自分だけの道を、私は知ってしまったのだ。

美しいものだけを思い出していたら、こんなにも無常なことがあったんだねって。

綺麗なものを思い出していたら、こんなにも非情なことがあったんだねって。

笑っていられば、そんなものは消えていく。嬉しくて、哀しくて。涙を見せることで私を創ったのだろう。あの人は今どこに？

「桜。こつちよ」

私の隣にいた人から声をかけられる。私の名前を呼ぶ人は彼女しかない。

「良子。私は探しに出掛けるよ。だけど、それは良子と共に行く旅と思ってもいいのかなってね」

割烹着を着て料理をしている良子は私の顔を見つめている。良子の隣で包丁で野菜を切り刻む。

「そつか。でも私は長旅に行きたくないわ。だって、疲れるんだもの。きつと、何度も同じことを繰り返すでしょうね。無駄なことも有益なことも。だけど」

ボウルの中に野菜を入れる。それを良子は鍋の中に入れる。そのまま煮込む。味噌の匂いが私の鼻をくすぐる。良い匂いだ。

「私は桜のような性格にはなれないから。きつと何度も苦しい旅になるのが嫌なのよ。すぐに屈託なく笑うあなたを見ていると、過去を思い出すのよね。昨日の様な、今日の様な。その思い出は思い出していいのかしら」

「ダメよ。そんなこと言つて、すぐに私の嫌いな具材を入れようとするのは」

「あ、バレた？」

良子はこちらを向いて、舌を出してからから笑う。その仕草が苛立ち、だけど可愛らしいところでもあるのが憎めないところだ。これから、どんな旅が始まるのかわからない。だけど、

こうやって、一緒に居られるだけでもいいのに、私はすぐに良子を馬鹿にしてしまう。そして嫌われてしまうのかと、何度か思った。そしてそのことも言ってしまったこともあった。が。そんなのどうでもいいじゃない。笑おうよ。

と、返された。私は少し固まったが、その後、何がわかったのかはご想像にお任せしたい。私は笑ってしまったのか泣いてしまったのかも。

とにかく夜半の頃合いになっっている事実を考えてみる。少しでも嫌になっただけならば料理の手を休めて、ベランダにて踊るだろう。ダンサーとして職業を全うしていたのは過去だけだ。それでも一緒に踊ってくれた、記憶の顔に薄らとモザイクの様なものがかさんでいるのは私のせいだろうか。その人は一緒に踊ってくれた。私を一人の人間として見つめてくれた、幸せの一時。踊っていた、楽しい毎日。そんな日々もいずれは終わるとわかっていても楽しくて、踊った。

夜食の頃合いにこんなことを考えているのは暇人だということだろうか。それでも良かった。そしてその幸せを享受した、そんなとき。今、ここで隣に居てくれる人が同じ人だったら、と思わなくもない。でもその後その人に良子を紹介してもらった時はびっくりしたのだ。顔が美麗だということに。女性の私でもドギマギしてしまうのがおかしかった。

鼻梁が少し高いところが特徴と言ったらわかりやすいだろうか。瞳も大きめで、眉を自然に剃っていた。そして、何より、髪が朱色で染まっている、外国人の血でも入っているのではな

いか、ほどの朱い毛は私の心を奪い去っていった。

今は割烹着を着ているのだが、普段の服を着ているのを見てみると私だけが浮くのではないのか？ と懸念があつてしまう、そんな姿勢や立ち回りなどの動きとそれに合つた服が見えて清々しいぐらいだ。ただのシャツとジーンパンでも青年だと思わせ、コートを着させれば恐ろしいほど、可愛く見える、そんなもの。私はとにかく、一緒にいて、幸せを別の意味で感じている。

ただ、性格がのんびり屋さんなのであまり、疎いところは笑わせてもらっている。面白いように、鈍感なのだ。

時々、一緒に具材を買いに行くのだが、やはり先ほど言わせてもらった特徴なもんだから、声をかけられるのだ。言葉を変えれば、ナンパされるのだが。

「あんた、結構かわいいじゃん。一緒にお茶でも飲まない？」

みたいなことを言われたら、必ず、

「えへへ。可愛いよね、私。でもあなたも可愛いじゃない。私とどれだけ可愛いかの勝負でもない？」

と、「可愛い」の連呼なのだ。というか男性に可愛いってなに？ と問うたことは今の私には怖くて聞けない。というか、違う世界に入ってしまったてないのか？ と思わなくもないと、何度も思った。

そして、その男性はかつこいいいといってくれないことに無常さに気付くのか、そのまま、笑いながら他の女性に声をかけてしまった。そして。

「あの人どうしたいんだろうね」

と、述懐。良子は、基本アブない人には靡く可能性はない、それだけは言える。

「ところでさ」

良子がいつの間にか私の料理を手にとって、テーブルに乗せている。綺麗な真っ白い皿でちゃんと布巾で拭いている、それに私は言葉も載せて返す。

「わかつているよ。良子は今日にでも行きたいんでしょ？」

「わかつているんだね。じゃあ、お酒でも飲まない？」

「やだよ。だって、私は酔ったら何したか覚えていないんだから。そのときに文句を言ったんでしょ？ そんな傷を与えるようなことはしたくないよ」

そうなんだけどね、と前置きを言つて良子ははにかんだ。何かを考えているときの顔だ。ただ、私は何もしないでもいいように言われているのだから、特に何も抵抗をしない。そしてその姿を見て、良子も特に言うこともなく、テーブル前の椅子に座る。綺麗に磨いているから、面白いほど滑るのだ。ここはどこかの展示場ではないのか、と思うほど綺麗好きが招いたある悲劇、とても名打つたらどこかに入賞でもしそうだ。

とりあえず、私はこの家に来てどれくらい経っているのかを覚えてはない。ただ、楽しいこ

とは続いているような気がする。楽しいことが続くことはとても良いものだと思う。当たり前なことだが。好きなものに触れているときほど幸せなことではない。まあ、人に寄るのだろうか  
れど。

そして、二人で無言になつて、悪くない沈黙の中で食事を摂る。美味しいと感じる感情は未だ変わらない。それが嬉しくて。楽しいのだということにも気づく。

「あれから、どれくらい経つたのかな。でも、あの人、今どこで何しているんだろうな」

私の呟きに特に意味はないと思つたのか、良子は私の頭を叩く。うるさいとも言っているのだろうか。私はごめんと苦笑い。そして無言の食事を再開する。

楽しいな。嬉しいな。面白いな。幸せだな。

でも。

寂しいな。

桜はよく、私について質問をするのだ。何があつたのかから始まつて、何かについて答えてほしいなどという風に。ただ私はそれに簡単に答えを言うのではなく、なるべく自分から考えさせるように答えさせている。でないと自分の答えが何だつたのかがわからないからだ。自分の答えに自信を持てるような答え方じやなきゃいけないのだ。

基本的にそれが頭の良い答えになるような気がする私でもある。きつとこんな考えは他

にはいいのではないのかと、時々思うのだ。私はいつものように答えを考えさせる。きっとこれが正しいと信じながら。

話は変わるが、信念というものは時々答えの変わるものだと思っている。いつも同じ答えなのだと、変なのだが、それでも同じようなものを持つているのはあながち間違いのないものだと思っているのが少し笑えるのだ。……笑い出したのはこんなことを考え始めたからだ。

いつも私のような変わった人間が答えなんかを考え始めるのはいつものようなことだと信じている。何をしているのかがわからないけれどもいつもものごとをしているのはどうしてなのだろうか。私は笑っている。故に私のことなんだと。こんな真理を持つてしまったときのようないつものことなんだと知っている。

……私は何をしているのだろうか。わからないが答えなんて求めてはいけけないのだと気が付いたときもあった。それでも続いていくことに淋しさを持つているのかな。淋しくて涙を流していたときから、いつものように世界を涙で包み尽くした。笑っても泣いても変わらないんだと、信じていたからいつものように、いつものように。笑ってほしいのだと、谷崎によく言われた。谷崎はまだ、私が独りでおままごとをしていたら砂場で遊んでいたことを指をさして笑ってくれた。それが今でも癩癩にさわる。だけど、独りから脱出させてくれた。その感謝から（ただ、当時は疎ましがったが）一緒に居るようになった。

私はその頃は元々人付き合いの下手くそだったけど、それでも一生懸命に教えてくれた。谷

崎はひたすらに厳しく優しくかった。人付き合いの大切さを何度も繰り返して教えてくれた。ただ単純に恋心を態度で教えるようなそんな感じなのかもしれない。それでも嬉しさを信じているのだから、これからは一緒にいてあげようと、少しずつ思っていた。

時々のように谷崎は私の香りを感じるかのように香水などもくれた。なんのために？　と思いつつ、綺麗な宝石を持ってしまったとき、これが婚約というもの？　と思いつつ、尋ねたら、爆笑された。

お前に素直に婚約なんてしねーよ。でも、そんな気分があるんなら、まずは今までを続けようぜ。

好きになったわけじゃない。元々の鈍感さがこんなにも発揮されるんだろうとは思わなかったのだ。今でも桜に馬鹿にされるのだから、私の鈍感はあるに過ぎているのだろう。こんなにも一緒に居るのだから、当たり前のようにだと信じている状況を当たり前に思えることが今でも楽しく思っているのだから。ひたすらに自分の答えを求めていると、隣に必ず、谷崎がいた。そして今は桜がいる。谷崎はどこかに旅をしに行った。そしてその直前に桜と出逢った。運命的な出会いだったって今でも思っている。

いつしか、三人で暮らしたいって信じている。だけど、それだけサイクリングされる永遠な環境はいつ止まるのだろうか。今の私にはわからない。だけど。

自分の答えを信じているのが、私だけなのだと今でも思っている。



「桜」

私は両親に呼ばれた。どちらの親に言われたのかわからない。声が被さっているのか、それともノイズの入ったような声だったからかはわからないけれど、私の機嫌は悪くなる。

無視して私は目の前にある玩具を弄ぶ。一緒に隣にいてくれた、くまのぬいぐるみに笑いかける。一緒に隣に居てくれる、うさぎのぬいぐるみに声をかける。それがまるで自分が両親のようなが気がした。

「桜。行くわよ。今日は久しぶりの外食よ。焼肉食べたいって桜が言ったでしょ？」

途端、私の聴覚に覚えのある声の流れ始める。その声は両親ではなく、ぬいぐるみから聞こえたような気がした。そしてじっとしていると、私は軽く持たれて連れていかれる。嫌だよという態度は示してはいけない。それは自分を折るからだ。それだけはしてはいけないんだと何度とも言い聞かせる。だから我慢する。一生懸命に我慢する。両親が嫌と一緒に居るのも嫌なのは子供心に嫌だっと思うことを去れたからでもないのに。こんな自分が嫌だっと思うこともあるが、仕方ないのだ。

「どうしたの？ 涙が出てるよ？」

気付いた。私が自分に言い聞かせていた。そしてこれからも気付く。自分が自分に問いかけるかのように呟いているのだ。焼肉を食べに行ってしまうという願望を持って、今から行

く場所に連れていかれるのだ。私は嫌だと何度も思ってしまった。だから嫌なのだ。綺麗事なんて信じない。好きな自分を求めてしまったのはなぜだろう。今だからこそ思えるのだと、何度か思ってしまった。今だからこそ失いたくないものがあるのだと、思ってしまった。それは偶然なのか、必然なのか。幼い私はわからなかった。

好きなことをしながら両親に連れていかれている自分。玩具は取り上げられることはなかったけど、それでも今では面白くないと思っても、当時は楽しかったのだ。嬉しくて仕方なかったのだ。何故、こんなにも面白いものがあるのかなと思っても、嬉しくなかった。互い違いに被る思いと答えはいつも笑わせてくれる。こんな子供を愛してくれた両親が嫌いだった。

私のことを放っておいてよ。私なんて大したことのない人なのよ？ 子供なんだから大目に見よ。

「大丈夫だよ、桜。いつもあなたを大切に、愛しているのよ」

本当に虫唾が走る。本当に喜んでいる。私の本当の気持ちはどっち？ それでも失わなかったのはそれだけ楽しかったからだろうか。でも見失ってしまった。楽しくても笑えていない。気持ちはどこに行ってしまったのかもわからないのだから。

私の感情に火を点したのは誰？ 私の答えに異を唱えたのは誰？ それでも私はわからずに運命の渦中にいるのだから。思い出してしまった、嘘と偽りの言葉。

「愛している」

嫌いだった。嫌になるのも無理はないのかもしれないのだから。いつもそんな言葉で私を騙しているのがわかっていいるからせせら笑った。だけど、それでも。通用しないときもあった。それが悔しくて。

そんなことを考えていたら。

車の中から外を見た。車の中にいることに気が付かなかった。そして。

「――施設にいれようか」「だけど――知らないでしょ」

私は喜ぶ。

やっぱりじゃないか。私を愛しているんならそんな言葉は出ないでしょ？

一人で玩具を弄りながら、これといつまでも一緒にいられるんなら私はどこにでも行く。憎き両親に仇を返すため。でも。

何を意味して両親を嫌になったのかの具体的な理由はどこにいったのだろうか。

そのときの私はわかってはいなかったが、今では、わかっているような、だけどわかっていないのだから。嬉しくてもすぐに包み隠さず教えてほしいのだと。

神に祈った。